難治性うつ病に対し電気けいれん療法が効く可能性を遺伝子で判定する

新開隆弘

産業医科大学 精神医学教室

【研究の背景】

電気けいれん療法（electroconvulsive therapy: ECT）は難治性うつ病にある程度有効とされ、比較的高い有効率を示す。しかし一方で、寛解後の再燃が同療法の課題の一つである。再燃のために再度、ECT をしなければならない例もよく経験するところである。

【目　　的】

上記の現状と課題を受け、本研究では、ECT の早期治療効果および長期予後について検討した。

【方　　法】

産業医科大学神経・精神科に入院し修正型電気けいれん療法（modified-electroconvulsive therapy: m-ECT）を施行した ICD-10 で F31：双極感情障害うつ病エピソード、F32：うつ病エピソード、F33：反復性うつ病性障害の診断基準を満たす 67 例を対象とした。抑うつ症状の評価にはハミルトンうつ病評価尺度（Hamilton rating scale for depression: Ham-D）17 項目を用い、Ham-D 得点の改善率が 50％以上を反応群、50％未満を非反応群、Ham-D 得点が 7 点以下まで改善した群を寛解群と定義した。診療録をもとに、m-ECT 施行前後の症状の経時的変化を後ろ向きに調査し、診療録上追跡可能であった 46 例について、m-ECT 施行後の再燃再発、再入院の頻度等について調べた。

【結　　果】

反応群は非反応群に比べて導入前の Ham-D 得点が有意に高かった。寛解群は非反応群に比べて導入前に精神病症状を呈する割合が有意に高かった。追跡可能であった 46 症例中 20 例が再入院していた。寛解群、反応群、非反応群の 3 群間で再入院率、再燃率、再発率に有意差はなかった。また、3 群間で再入院までの期間、再燃再発までの期間に有意差はなかった。67 例中 8 例が再度の m-ECT を施行していた。再 m-ECT 群では、うつ病の発症年齢（69.0 歳対 47.1 歳）、及び m-ECT 施行時の年齢（74.4 歳対 57.0 歳）が有意に高かった。

【考　　察】

先行研究では治療抵抗性うつ病に対する ECT の反応率は 65.8～86.7％と高い有効性が示されている（Khalid et al, 2008; 須賀ら, 2006）。当院で施行した症例でも同様に ECT により反応率 79.7％、寛解率 56.3％と高い治療効果が得られ、早期の症状改善には ECT は効果を期待できる治療法であると考えられた。ECT 反応群は非反応群に比べて導入前の Ham-D 得点が有意に高く、寛解群は非反応群に比べて導入前に精神病症状を呈する割合が有意に高かった。よって重症例や精神病症状を有する例は特に ECT による効果が期待できると考えられた。

【臨床的意義・臨床への貢献度】

ECT は短期的治療期間においては、高い治療効果を示す一方、長期予後・維持効果については、疑問が残る結果であった（再入院までの期間は 7.4 ± 7.6 ヵ月）。ECT 後寛解を維持している群と、再燃、再発を示す群において長期予後に関与する因子を検討することは今後の課題であり、今後は遺伝子解析を含め検討していきたい。

【参考・引用文献】

1. Khalid et al. The Effectiveness of Electroconvulsive Therapy in Treatment-Resistant Depression: A Naturalistic Study. *Journal of ECT* 24: 141-145, 2008.
2. 須賀英道ほか. 難治性うつ病における ECT の有効性と再燃性（予備研究）. *臨床精神医学* 35: 1183-1188, 2006.